

ドライ・ラガー

yukikago

私が生まれるずっと前に戦争というものがあって、我が国の国力と繁栄はその時の勝利からもたらされたのだと言う。国歌すらその戦いを高らかに歌うものに改められたくらい、それは、国というものの明暗をわけたものだったのだ。

ただ。その戦いにより我が国が失ったものもまた大きいという事実には老人は口を閉じ、子どもはそれを元からこの世に存在する当然の風景と見なした。

私は、そういった戦火の後に生まれた砂漠の上を歩いていた。時より私よりも歳がある建物……しかし今ではもう、キップルである……まで近づいて日陰で涼をとりながら、とにかく住み慣れた街を離れようと歩いた。

戦争が、また起きたのだ。

勝利の栄光などもはや昔の話なのだ。軍備の整った兵団を持つ国が現れ、10年にも及ぶ激しい防戦が続いた。領土は奮闘虚しく削られていき、ついには我が国の王都までもが陥落するに至った。

私は王都に住む人間で、しかも運良く飛行艇で脱出出来たために、殺されるという事はなかった。しかし、その飛行艇も敵軍の銃弾により墜落した。そうして、無傷で生き残れた者は私一人であった。

王都に引き返しても無意義だ。しかし、当てもなく砂漠を彷徨うのも無意義だ。暑くて頭がぼんやりする。水が欲しい。でも水って飲むとどうなるんだっけ……思考が、蜃気楼のように霞んでは浮かんでは消えていった。

そうしては私はついに、日陰となる古い建物の壁に背中を預け、動けなくなった。疲労困憊で、動けないのだ……。普段こんなに歩く事はなかった。さらに言えば、砂漠はとても歩きづらい。一步踏むたびに地面が沈み、そのたびに足に力を入れなければ赤子よりも歩みが覚束なくなるのだ。

もしここで誰かが助け舟を出してくれれば……甘い考えながらにそう思った。私はこのまま何もせずに生き絶えて、古い建物同様に、キップルの一部となり、そして、最終的には砂となってこの砂漠の一要素へと置換されていくのだろう。

くそ。せめて、父や母や、姉や、周りの者達が、逃げ延びてくれていて欲しい。眠るように意識が遠のいて、私は少しだけ安息を覚えた。

いつまで意識を失っていたのだろうか。それすらもよく分からない。

声がする。低めで、男のもののような。それはどうやらわたしに向かって話しかけているような気がした。肩を揺すられてもいる。目を開けると、そこには我が国の軍服を来た人間がいた。軍人にしては妙に細い身体つきであった。私の知る軍人というのは、大抵戦争に備えて体ががっしりとしているか、脳に栄養を与えるために肥え太っているかのどちらかであった。

軍人はホッとした表情を浮かべていた。歳は若く、私と同じくらいだろう。顔形は中性的で、整ってはいるが、この砂漠の風に吹かれた証たる肌の乾燥が見て取れた。間違いなく国の者である

。

「お嬢さん、良かった。とりあえず水をお飲みなさい」

軍人は水筒を差し出した。今まで忘れていた渴きを強烈に意識させられ、私は夢中で水筒の水を飲んだ。

ぬるく、質も悪く、味もそれに比例するものであった。しかし今の内臓まで渴ききった私には神からの施しと思われた。人前だと言うのに、喉をならし、情けなく、水を飲み込んだ。

「お嬢さんは都心のご身分の高い方なのだね。砂漠に何の装備もなく飛び込むなど考えられん事だ。戦争で出来た砂の中には有毒なものもあるから、不用意に生身を晒してはいけないのだよ」

我が国の王都は砂から人を守るため、全体が高い壁で覆われていた。それは、都が砂と化す脅威から身を守るためである。

「まあ……都心が陥落した時勢となつては致し方あるまいか。装備も整える時間もなかったろう。君も逃げてきたのだろう。このまま御身を砂に晒しては寝つきが悪い。乗っていくかい？」

軍人は親指を立てて、軍人の背中の方を差した。

あっ、と私は驚いた。今まで気づかなかった事もあったが、その迫力と、少しの優雅さが、心を掴んだ。

それは四脚で走る兵器であった。動物の形を模しており、猫なのか犬なのか分からないが、顔がついている。そしてその動物は、私をじっとみている。その機械の目は、間違いなく私を捉えていた。視線の熱烈さが、明確な意思を持っている事を意識させる。

「おお。ヒュウガが興味を持つ人間とは珍しい。となると、乗っていくかいなんて質問は無粋だった」

軍人は私に手を伸ばすと、両腕で私を持って宙に浮かせた。細い腕だが、確かな力強さがあった。

。

「あ……あの、お水については感謝しています。私を、どこに連れていくのですか」

「これは失礼を。私は、アンジェリカ・オリオン。陸軍技術部少尉です。これから御身を、軍規に従い我々の基地に保護致します……ま、言っちゃ悪いが、強制連行だ。御身の名は？」

「私は……いえ、私も、アンジェリカと言います」

「おお！ もしや歳は20くらいでは？」

「はい、20になります」

「やはりそうか。私達の世代は王家のお姫様が生まれた歳と近いから、あやかって同じ名前になる事が多い」

軍人……アンジェリカ少尉はうんうん、と言ったように納得していた。

しかし……アンジェリカというのは女の子の名前なのではないだろうか？

「失礼ですが……少尉さんは……」

「あ、もしかして男だと思ってたか。口も悪いし、声も低いし、顔もこの通りだから、男に見えるんだ。お嬢さんが間違うのも無理はない」

抱きかかえられたまま、兵器のお腹まで近づいた。自動でばしんと音をたてて、兵器の肌が開く

。そして中から、椅子がゆっくりと出て来た。

「アンジェリカ嬢はこの席に。中に入ると色々なボタンやモニタがあるが、いじっても何も起こらないので安心して欲しい」

少尉は私を席にゆったりと下ろした。椅子は硬く、長く座っていると体までかちかちに凍りつきそうであった。

「私は頭の方に乗るので。では良い旅を」

席が内部に入ったのを見届けてから、少尉は肌を閉めた。そうすると、肌の部分に足をつく事が出来た。

冷気があってとても快適な空間だった。今までの不愉快さが嘘のようで、汗もすぐに引いていた。あとここで水を浴びれたら……というのは、私のわがままだろう。

ぐらりと軽く振動が起きて、右側のモニタに少尉の顔が映し出された。

「では、レーベンプロイ基地まで移動する。シートベルトは着用してくれ。あと、神に祈る準備もな」

大きな揺れが何度か起こり、その後小刻みに一定の周期の振動へと変わっていった。この席の中では何が起きているのか分からないが、たぶん、あの四脚で効率良く走れる早さに到達したのだろう。始めの大きい揺れは、そこに至るまでの助走のようなものなのだろう。

リズムの良い揺れの中で、今度は安心から来る眠気を持って、意識を落としていった。

レーベンプロイ基地は、アンジェリカ少尉がそうであるように、王家の名前にあやかって名付けられた。元々現在のレーベンプロイ王は軍属であり、この基地と由縁の深いところもあった、という話らしい。

「よく休めたようだ。足取りもしっかりしているし、顔色が先程より随分と良くなったぞ。今更だが、レーベンプロイ基地へようこそ」

少尉はにかって笑った。

アンジェリカ少尉は快活な人であった。他の軍人とすれ違うたびに、少尉は親しげに軽く会話を交わしていた。

「ハスキーボイス。その可愛い娘さんはなんだ」

「この度嫁を貰う事になってな。なんと彼女の名前もアンジェリカだ。まさに運命の出会いだろう？」

「やっぱりお前は嫁に貰われるより貰う方か？ そうだよなあ」

「アンジェリカ、どこからそんな御令嬢をさらってきたんだ」

「良いだろう？ 見な、この絶世の瞳。砂漠を歩いてたからこそナリがキップル塗れだが、この瞳の翠色は砂漠の砂などでは汚れない気品の高さがあるのだよ」

などなど……。

「少尉は口がお達者でいらっしゃる」

「気を悪くしたのなら済まない。しかしこの基地は軽口ぞろいだ、慣れておくといい」
少尉と私は、とある一室に来た。そこは効率と質実さを重視する軍にしては、とても豪華な部屋であった。扉は本物の木製の重いもので、部屋も木目調を基本としたものばかりで構成されていた。

そして、その部屋の中心的位置には、重そうな机と、それに似合うだけの底の深い顔立ちをした人物がいた。少尉とは対象的であった。その口から冗談の一つも出て来そうにはない、重々しい雰囲気があった。

「アンジェリカ少尉、君は相変わらずノックをしないな」

「は、失礼を致しました。何分、礼儀を知る程素養がありませぬゆえ」

少尉は、先程とはうってかわって、背中を伸ばし、腕を後ろに組んで喋っている。軍人はそうやっていつも喋っているものだ。

「要件はなんだね」

「王都陥落の件はご存知と思いますが、その際、都外へ逃げ延びた民間人を救出致しました」

「避難民のための特別区は既に設置済みだ。民間人なら、そこに誘導したまえ」

「ただの民間人ならばそうしました。しかし、こちらの方は違います」

少尉は右手を前に出し一歩前へ出るよう促した。私はそれに従って、前へ出た。

「その女性がなんだというのかね」

「この方はアンジェリカと言います。ヒュウガに入った情報には、王家姫君を乗せた飛行艇は、私が撤退した方角と同じ方面へ向かい、敵弾により墜落したとありました」

その木目と同じような顔に、少し戸惑いの色が出てきた。目を大きく開き、少尉と、私を交互に見ている。

「私の救出した民間人は、アンジェリカ姫であると推論しました」

……！

「少尉、他の可能性も考慮したのか？ 偶然ではあるまいな。当人は驚いているようだが、確認はしたのか？」

「ヒュウガが、彼女に興味を示しました。姫でないにしろ、特別な身であります。閣下」

「なに？ そうか……では丁重にもてなしたまえ」

そして閣下と呼ばれている人は、私を見て微笑んだ。先程の厳粛さとは離れた、優しい顔だった。

「あまり良いところではありませんが、どうかごゆるりとお過ごし下さい」

「閣下、あと、この事は内密に……」

「もちろんだ。あの機体は我が基地の最重要戦力だからな。ではアンジェリカ・オリオン少尉。君をそちらの……姫様の護衛に任命する」

「はっ、ありがたい事ですあります」

重い扉が閉まって、アンジェリカ少尉は緊張から解き放たれたような溜息をついた。

「いつから私が……その……そういう血筋だと思ったのですか」

「あ、やっぱりそうか、姫様なんだな」

しまった。少尉は本当は確信なんてなかったんだ。それなのにわざと、ああやって見せて、私から身分を出させようとしたんだ。

「ただの勘だ。確信など何もない。姫君を乗せた飛行艇が墜落したという話を踏まえての推論だと、閣下の前でも言ったはずだ。それに……」

「それに？」

「ヒュウガは人に滅多に懐かない。懐く人間は、民間人だろうとゲストとして丁重にもてなすよう前から言われている。御身がどうあっても、ヒュウガが興味を持つ限り、ただの民間人扱いはしないのだよ」

「ヒュウガというのは、先程乗ったあの兵器ですか」

「そう、私の愛機さ」

「……アンジェリカ少尉は、他の軍人とは違うのですね。普通、私の身分が分かったら、かしこまってしまうものですが」

「教養がないとも言ったはずだ。姫は軍人の儀礼はお嫌いかな？」

「得意ではありません。あなたが先程の方になさったような敬礼も、かしこまれる事も……私はあまりそういうしきたりには向いていないのでしょう」

「なら別にいいじゃないか。私は姫だろうが、路傍の物乞いだろうが、同じように扱うだけだ。国民を守る軍人とはそういう事だ」

アンジェリカ少尉はにっと笑った。

……？

「ひーめー。そこの道具とってー」

私はアンジェリカ少尉と一緒にヒュウガの体を磨いたり、中を分解してメンテナンスを行ったりしていた。

ヒュウガに好かれる人間が特別なのは、好かない人間を寄せ付けないヒュウガのわがままからなるものだった。今までは、少尉が一人でヒュウガをメンテナンスしていたそう。

言われるがままに、道具を少尉へ渡したり、よく分からない機械を分解したりもした。肌の部分には砂漠の砂が溜まっていて、とても煙たかった。

ヒュウガは背中に大きな箱と銃身を持っていた。この箱は外そうとするのをヒュウガは大変嫌がった。暴れるために、私や少尉ですら、そこを下手に触る事は出来なかった。

少尉は私の事を姫と大声で言って回った。同じ名前だからというのが少尉の弁であるが、私からすると血筋が他の人に知れ渡るのかわかったものではなく、呼ばれるたびにびくびくした。しかしそれはただの杞憂で、周りの人にも……やはり少尉と名前が同じだからという理由で……姫か、アンジェリカ嬢と呼ばれていた。

「姫、避難民区画にはあまり近寄らない方がいい。今はみんな感情的でな、王家批判が跋扈している。姫は顔が割れてないから良いものの、お父上など見つかり次第張り付けにされそうな勢いだ」

ヒュウガの右前脚の調節をしながら、少尉はそう言った。

「別に血筋が戦争を招いたわけではないはずだ。だが自分の家を燃やされ、親族を失った人間の心情などそんなものだ……姫だって、肉親の行方は未だ不明なのに」

父も母も姉も、側近の者たちも消息不明だった。どうしようにも私一人では何も出来ない。そう思うと沈痛な心持ちになった。そうなると思うとすぐに少尉はそれに気づいて、手を動かそうとさせた。

「手を動かせば少しは気が紛れる。なに、そのうちこのヒュウガで王都を取り戻す日が来る。そしたら国を再建すればいいんだ。城も、街も、作り直せばいい。しかし生き物は、作り直せん。どうあってもな」

少尉は、自分に言い聞かせるような口調であった。

……。

アンジェリカ少尉は、ヒュウガから受信する内容を見聞きしながら、眉をしかめた。その内容というのが、敵軍がこのレーベンプロイ基地を包囲している、というものであった。

「少尉……私達はどうなるのでしょうか」

「このままいくと全滅だな。奴さん達は、確実に領土を増やす戦法をとっている。王都陥落も、そうやって包囲全滅の手法をとっていた」

「降伏するというのは……」

「ない。奴さんはね、確実に、いいか、確実に領土を増やそうとしているんだ。反撃されて領土が減っては困るのだよ。だから、基本的に民間人もろとも虐殺するのさ。降伏するという事は、ここにいる全員が皆殺しにあうことを意味してる」

少尉は冷静であった。敵に囲まれかけているというのに、きちんと現状を把握している。とても冷静……なんだが……

「少尉はなんでお酒を飲んでるんですか」

「いやあ……いつ死ぬか分かったもんでもないし、飲める時に飲まないといかん。なあ、ヒュウガ」

ぐるる、と喉元で声をあげるヒュウガ。全く、冷静なのか頓珍漢なのか分からない人だ。

「姫も飲む？」

「いりませんよ。少尉、そういうのはこのピンチを抜けてからやってください」

「そういうな。あと一日くらい猶予はあるよ。そしてね、相手さんは、この基地を攻めるにあたっての最大の不安定要素を理解しきれていないと推測出来る」

「なんです、その不安定要素というのは」

「姫もこの基地は攻められんな」

けらけらと笑う酔っ払い。

くそ。何だかとても腹立たしい。規模はあるにせよ、こんな砂漠の真ん中にあるだけの基地に何があるというのか。

……！

目が覚めた。翌日である。

朝が来たのか、夜が開けていないのか、よく分からなかった。レーベンプロイ基地の外は砂嵐が吹き荒れ、大気には大量の砂が殺到し、太陽の光を遮っていた。一步外に出るとそのまま吹き飛ばされてしまいそうな程に風が強い。なるほど、これが少尉の言っていた、レーベンプロイ基地攻略の難しい点なのだろう。

朝食を食べながら、少尉と話した。

「暗闇の中での戦闘というのは考える程簡単じゃない。それにこの砂嵐だ。弾道が風の勢いで曲がって、目標に当たらんのださ」

「しかしこの砂嵐が明けたら……」

「そう、攻め込まれる。だから今から攻める。ヒュウガは北部、レイチェル隊は南東部、ポニー大隊は南西部から攻める。奴さん達は包囲が得意なんだが、包囲すると1の戦力を10に分けて配備しないといけない。そうすると、どうしても一点突破に弱くなる。1の戦力に2を当てれば、大抵の場合、2が勝てる」

「ヒュウガは単独で2なんですか？」

「うーん……」

アンジェリカ少尉は少し表情を曇らせた。それが問題なんだ、という事が、その顔から見て取れた。

「奴さんの戦力が無限じゃないように、うちの戦力も有限なわけだ。で、ヒュウガは、単機で2以上の能力がある。本気を出せば、なんだが……」

「なんだが？」

「……パイロットが二人必要なんだ。姫が乗っていた席に、ただ座っているだけでもいい。二人いないと、ヒュウガの能力は何故か上がらない」

「……」

硬いパンをかじって、野菜の入ったスープの具を食べた。

「姫にその気があるなら……是非ヒュウガに乗って欲しい。引き金を引くのは私だから、姫の手が汚れる事はない」

人参を飲み込んだ。私は人参が嫌いだ。

アンジェリカ少尉が引き金を引こうが、私が引こうが、変わらないような気がした。ここで殺されるくらいなら、手が血に塗れても良いような気がした。私は、攻めて来た相手をどうすればいいのか、実のところよく考えていなかった。私には判断力というものがなかった。もしこの場に私の肉親がいれば、代わりに肉親が答えていただろう。今、ここには、そのような人はいない。

……。

アンジェリカ少尉は明瞭に、敵は殺すものとしている。

「少尉は、何故人を殺そうとするのですか。降伏する事で、皆の命が助かる可能性も……」

「前も言ったが、ない。奴さんの軍隊は、相手が降伏したら虐殺してよいという事になっている」

「……」

「無理強いはしない。御身がそれを拒むなら、私はポニー共に混じって、二方向から攻める話になるだけだ」

「私は軍人ではありません。本当に座っているだけで、それだけでこの危機を脱する事が出来ますか」

「出来る。間違いなく」

「……分かりました」

少尉はほっとした面持ちになった。

……。

ヒュウガが速度に乗ってからというもの、ガリガリと何かが削れる音が外側からしていた。きっとヒュウガの肌と、砂嵐で舞い散る砂がこすれる音だろう。私は、ヒュウガのお腹の中で、そんな不吉な音を聞いていた。

「……敵の機体は非常によく出来ている。人型で火力と命中率を重視されていて、火力は敵を圧倒し無力化するため、命中率は自軍に攻撃を当てないようにするため……火力を上げた代わりに、機動力が大幅に制限されている。それも、包囲殲滅にある意味では向いている。しかし、ヒュウガのような小回りのよくスピードのある機体に対しては集団と言えど無力だ。さらにこの嵐……近接戦なら負けん。姫、怖いか」

アンジェリカ少尉は、右側の画面で忙しく何かを操作する片手間に、私の事を気遣った。

「こういう時、正義のヒーローは二択の葛藤しか出さない。一つは『怖くない』。一つは『怖い』。これはどちらも正しい。そしてどちらも矛盾していない。ただ、私は軍人だ。恐れのない人間は武勇を立てやすいが、良い軍人にはなれない。また、怖がるだけの人間はそもそも軍属に向かない。分かるか、姫」

私は首を横に降った。私は軍人ではないし、銃器の一つも扱えない、今となっては城を追われ、ただの一般市民に成り下がっただけの人だ。ただ、ヒュウガに気に入られた。それだけだ。他には何も出来ない。私は無力だ。

「レイチェル。貴隊の敵殲滅とこちらの敵殲滅、どちらが早いのか賭けよう。そうだな、私が負ければ貴隊の全員に酒を奢ろう。そちらはどうする？」

「こちらレイチェル。貴機がこちらに勝てるとは到底思えないが……私からは特に提案はない。貴機が勝てたら賭け金分の要求を飲もう」

「おーけー、それだけ約束が取り付けられれば十分だ。貴隊の武勇に期待している」

「貴機の活躍に期待している。ポニーには負けるなよ」

……我が国の軍人には飽きれるばかりである。私の無力さよりも、それを咎める事の方が大事だと思われた。

「少尉、今のはなんですか」

「何の話やら。そうら、奴さん達気づいたぞ。しっかり掴まれ、姫！」

体が右後ろに強制的に流された。何かが炸裂する音も同時に聞こえてくる。私は、中央のモニタ

をいじって、何か外の景色を映そうとしてみた。そうやっているうちに、今度は左に、また右に、と体がぐいぐいと引きつけられていく。ヒュウガが敵の攻撃を避けるたびに、Gが体にかかっているのだろう。

「敵も中々にやる。この砂嵐の中でこれだけの精度とは」
少尉は真顔のままであった。

私はなんとかして中央のモニタから外を映し出せるようにした。そうしないと、何が起きているのか見当がつかなかった。モニタは前方を映しているらしく、敵の砲火が光っては、ヒュウガの近くで爆発が響いた。この閃光が当たれば私も、少尉も、死んでしまうのだ。これが、戦争。これが、銃器……。

「この距離でこの砲火……避けられまい！」

少尉は叫ぶ。ヒュウガの背中に取り付けられている銃身が音をあげた。飛び出たビームは幾つかの光になって前方を飛び、狙っていた敵の兵器を容赦なく鉄クズへと変えていった。ヒュウガは今度は宙を舞い、最も近くにいた敵兵器に前脚の爪を突き立てた。同時に、上の銃身が音をあげ、また別の敵を狙った。

避ける、放つ、跳ねる、噛み付く。

ヒュウガは敵の鈍足な機体を容易く撃破していった。

しかし、いくら少尉の操縦が上手くても、ヒュウガも所詮は一機の兵器だった。敵の攻撃を足に受けたらしく、ヒュウガは呆気なく砂の大地に頭をついた。

「くそっ、とちったか！ ヒュウガ、動け、このままだと不味いんだよ。お前も姫もやられちゃうぞ！」

少尉は何とかしてヒュウガを動かそうと怒鳴る。

敵の砲火で近くの砂が舞い、また気味の悪い砂がこすれる音がした。

……このままでは、死ぬ？ 私が？ 少尉が？ ヒュウガが？

嫌だ。死にたくなんかない。何のために慣れ親しんだ都を離れたというのか。父は、母は、姉は、私が死ねば皆悲しむだろう。

敵に殺されるのはもっと嫌だ。理不尽でしょう、こんなの。立ったの数秒で何十年もかけて生きた人間が一瞬で終わるなんて。

そう思うと無性に腹が立った。ヒュウガには意思がある。それを痛めつけた奴なんか大嫌いだ。

何もせずに死ぬのも、嫌だ。少尉は死なせない、キップルになりそうな私を助けた恩人だ。

ぐるる、とヒュウガが私に呼応したかのように唸る。私の席の周りには緑色の綺麗な光が溢れはじめた。その光が導くままに、私は操縦桿に手を置いた。

……！

ヒュウガが、何かの力で宙に浮いた。

その後何が起こったのか、手に取るように分かった。ヒュウガの背中の箱が、後ろ足と一つになって、それが二脚の足となった。ぐるりと腰を180度捻って、それを下半身とした。

頭は少尉と一緒に移動し、胸となった。前脚は腕に代わり、頭は新しく人の形のものがそこに

ある。ヒュウガは人型となって、砂地にその身を浮かせている。

「おお……やはり、二人で成った」

少尉は、こうなる事を知っていたようだった。

「彪我！ 私達は死ねないわ！」

私は夢中で操縦桿を握った。彪我は背中の銃身を手にしつつ腕の爪で敵を貫く。銃を撃って敵を薙ぎ払い、近づく敵は足爪で胴体を切り裂いた。そうして戦っている間、彪我はずっと、その足を地面につけずに浮いたままだった。

……。

無我夢中で、気づいた時には危うくレーベンプロイ基地の機体を攻撃しようとしていた。それは少尉によって止められた。敵軍は壊滅したらしい。私が、敵をたくさん倒したからだ、と、少尉は言った。

……疲れた。力が抜けて、操縦桿から手を離した。硬い座席に背中を預けて、初めて背中がびっしょりと汗をかいている事に気づいた。緑色の光はもう、この席のどこにもなかった。

ヒュウガは元の四脚の姿に戻ったらしい。

「ありがとう、姫。お陰で我々の基地は救われた」

「少尉、私は、生きているのですか」

「姫も私も無事だ。ヒュウガは手傷をおってるが、元気だ。基地の皆も、姫に救われたのだよ」ぐるる、とヒュウガは元気そうに唸る。

「私は、何をしたのか、よく、分かりません。でも、とても、疲れました……」

私は、また、深い所へと落ちていった。

……。

そこは見た事のない世界だった。樹木があり、そこに根を張り、葉をつけ、時に花を咲かせる場所だった。

世界のほとんどが砂漠と化した今となっては、このような樹木だらけの……森、というものが存在していたのは、私が生まれてもないくらい遠い昔の話だった。私はその森の中で、一人静かに横たわっていた。夢だ。こんな森は、都心の壁の内側にさえ、もう存在しないのだから。

枯葉の床は表面こそ乾燥しているものの、中は湿っていて、横になっていると背中にじわじわと水分を感じた。眼前の葉は日光を柔らかくし、風が吹くたびにその表情は多彩に変わっていった。葉がこすれ、ざわざわと木々が鳴っている。遠くで、何か鳥のような鳴き声もする。静かだ……そして何より、心穏やかに過ごせる。

ここは、どこだろう。いや、どこだったんだろう。どうしてこんなに穏やかで、住み良い世界は、なくなってしまったのだろう。

……？

不思議な夢を見た。しかし心持ちはとても良く、またあのような夢を見たいものだと思えるよ

うな、そんな不思議さだった。

私は上体を起こした。左には医療用の機械が並べられ、私の色々なものを観察していた。右にはアンジェリカ少尉がいて、うたた寝をしていた。

「少尉、アンジェリカ少尉、アンジェリカ・オリオン少尉」

「う……お。おお、姫、目が覚めたか」

アンジェリカ少尉は眠そうな顔から一転、とても嬉しそうな顔をして、私の体調はどうかと聞いてくれた。

「御身のお陰で、私も賭けに勝てた。礼を言っても言い尽くせん」

ああ、そうですか……。

「少尉、あれから、どうなったのでしょうか」

「敵は都心まで後退した。現在、ポニー大隊がレーベンプロイ基地と都心の合間に拠点を設けて、反撃に出る準備に入っている。御身は包囲網を敷いていた敵軍の8割を破壊してくれたお陰で、ポニー共に余計な心配をさせずに済んでいるよ」

8割……何の話だろう。私はあの時、ただ、必死で……死を払い除けたかっただけだ。

「混乱しても無理はない。彪我は、御身の闘争心を食べて事を成した。思う力が強ければ強い程、あれは1の戦力を10にも20にも出来る」

「彪我……とは、あのヒュウガが変形した姿の事ですか」

「ヒュウガは二人で乗った時のみ、あの形態になる。あれは人の衝動を煽動し、餌にする代わりに、膨大な力を与えてくれる機体だ。神にも悪魔にもなる、それが彪我だ」

少尉は、改まったように立ち上がり、私に頭を下げた。

「何故頭を下げるのですか」

「……私は御身があれだけの力をお持ちとは思わなかった。御身があのまま突き進めば、レーベンプロイ基地はキップルの仲間入りを果たしていただろう。それに、都心の兵力も駆逐出来たかもしれない。しかし、それは、御身の命を生贄に捧げた勝利だっただろう。彪我は人の感情と同時に、人の生命力も餌にする。御身はあれから、5日も眠り続けた。私は、御身にもっと、ヒュウガについて説明すべきだった」

「私はこうして生きています。アンジェリカ少尉もです。私は廃人になったわけでも、正体を抜かれたわけでもありません……それに、少尉は、暴走していた私を止めてくれたのでしょうか？なら、それで良いではありませんか」

そう、私達は生きているのだ。何も出来ない私にも、何かが成せるのだ。それが分かっただけでも、私は喜べた。人の役に立てる、それが何より誇らしい。

少尉は、少し躊躇った後、顔をあげた。

「……私はヒュウガを整備する。姫はもう少し休んでいて欲しい」

……。

ポニー大隊というのは、攻めにおいては烏合の衆である、というのがアンジェリカ少尉とレイチェル・デッカー少尉の意見だった。実際、前回の戦闘で彪我以外の戦績を見て一番悪かった

のは、一番頭数の多いポニー大隊であった。

ポニーという名前は、すなわち、戦闘には弱いという意味を含めているらしかった。

ポニー大隊が50機からなる大隊なのに対して、レイチェル隊は4機、ヒュウガはそもそもチーム名すらない一匹狼である。頭数のみではどうしようもない差というものが、あるようだった。

ただ。ポニー大隊は攻撃に向かないというだけで、設営、防衛、補給などの活動にはレイチェル隊もヒュウガも遠く及ばない能力を有している。要は、役割が違うという事なのだろう。彼らは防衛、私達は攻勢、そういう役割なのだ。

私がやっとレーベンプロイ基地の病室から出れるようになって、ヒュウガとレイチェル隊は中間地帯のポニーの中隊と基地防衛が変わる事となった。

アンジェリカ少尉は、私の戦線復帰を渋ったが、私はレイチェル少尉の後押しも手伝って、無理やり押し通る事とした。

「姫はあんなに昏睡したのに、また乗ろうって思うのはなんでだ」

「理由なんてありませんよ。私、教養がありませんから、同じ事を繰り返してしまうのです」
それを聞いていたレイチェル少尉は、ゲラゲラと笑っていた。

「ハスキーボイスの相棒もだいぶ手慣れてきたな」

「うるさいよ……」

ぬう、と少尉は唸った。

……。

バス中佐……あの部屋にいた老練そうな軍人である……と、ポニー大隊のハートランド大尉、レイチェル少尉、アンジェリカ少尉は、部隊指揮官として今後について作戦会議を行っていた。私は、その間に簡易的に設営されたこの基地を散歩した。私には仮ながらも軍属という扱いを受け、今は真新しい軍服を着ている。軍服を着ると、何だかしゃんとした心持ちになるのは、父の血がなす事なのだろうか。

歩いていると、ポニーの隊員達にじろじろと観察されたりもした。やはり、私のような人間は軍では珍しいのかしら……とっていると、ある軍人が私に話しかけてきた。

「君は見ない顔だが、もしかしてあのヒュウガに配属されたのかね？」

その人の階級章を見ると、どうも中尉のようだった。ポニーの階級は役割と直結していて、中尉と言う事は、中隊指揮官を意味している。歳は50くらいだろうか。白髪と深い皺が、より一層歳を強調していた。

「はい、そうです」

「……君が、先の戦闘で、あの悪魔を操っていたと？」

「悪魔……ですか？」

「君は何も知らないようだな」

中尉は辺りを見回した後、小声でこういった。

「あの機体は、我が軍の作った超兵器などではないのだよ。あれは、どこで作られたのかも分からんし、何より、何で動いているのかすらも、技術部は解明出来ずにいる……それに、ヒュウガ

に配属された人間はことごとく戦死するのだよ。アンジェリカ・オリオンも、君も、きっと、そうなるだろう」

大尉は、意地の悪い下衆な笑顔を向ける。

アンジェリカ少尉や、レイチェル少尉がポニー大隊を好意的に思っていないのは、こういう、意地の悪い連中への憎悪のようなものだろうと思った。

「アンジェリカ少尉も、私も、死にません」

「前の奴だってそう言って死んでいった。可哀想にな、兵器に魂を吸い取られて死ぬなどとは。我が軍の兵器が、人を銃弾にする非人道的行為を行うなどと嘆かわしい」

「……」

私は心持が悪くなった。周りで聞き耳を立てているポニーの連中も、にやにやしながら私を見ている。

くそ。なんて陰湿なんだ。

私は彼らを後に自分のテントに戻った。

……。

アンジェリカ少尉とレイチェル少尉は仲が良かった。私がテントに戻ると、レイチェル隊の方も混じって、お酒を飲んでいた。

「あ、姫、おかえり」

私は少尉の隣に腰掛けた。

「会議はどうでしたか」

「我々が敵陣を切り裂き、傷口をポニーが広げていく戦法だとさ……なんだ、ポニーの連中に冷やかされたのか？ 機嫌が悪そうだ」

「ええ。凄く陰湿な方々です。あの白髪の中尉さんなんかは特に」

「白髪の中尉？ それはあれか、ご老人のコロナ中尉だろう」

と、レイチェル少尉。

「中尉は噂好きの俗物だからなあ。部下もそれに似て俗物だ。軍隊なんて、一つの村みたいなもんだからな。噂話が飯より好きだ、という奴らは多い」

アンジェリカ少尉は特になんとも思っていないように、にかにかしている。

……アンジェリカ少尉には死んで欲しくないと思った。恩人である以上に、私は、この人のひょうひょうとした所には、人間として惹かれるものがあつた。

「アンジェリカ嬢も飲むか？」

レイチェル少尉は、有無を言わずお酒をコップに注ぎ、私に差し出した。

「今日は頂きます」

「おお、良いね」

私はお酒をあおり……そしてむせた。なんだこれは、口の中が焼けたように痛い。飲み込むと、お腹の中まで温かさが残ってくすぶっている。熱くもないのに、これはとても熱い飲み物だった。

。

「姫にはまだこのくらいの酒は無理だな。レイチェル、そこのトニックと混ぜてやろう」
少尉は私のお酒を大きめのコップに移して、透明な液体と混ぜてくれた。そうして飲むと、先程よりは幾分かは飲めるようになった。

「……美味しくは、ないですね。何故みなさんは、こんなものを美味しそうに飲めるのでしょうか」

「そのうち、飲み続ければ、姫にも分かるよ」

「そんなものなんでしょうか」

「そうさ、酒を飲み干せてこそその人生さ」

アンジェリカ少尉は、自分のコップのお酒を一気に飲み干した。

……。

私と少尉は、並んで簡易ベッドで横になった。テントのすぐ横にはヒュウガもいて、彼は遠くに見える敵陣に動きがないか、じっと見守ってくれている。

「アンジェリカ少尉」

「なんだい」

「ヒュウガは、よく分からないもので動いているというのは本当ですか」

「コロナ中尉がそう言ったのか？」

「はい。ヒュウガは人を鉄砲玉にするとも。これは、前に少尉も似たような事を言っていましたね」

「……中尉の言っている事は、残念だが事実だよ。あの力で命を落とした人間は実在する。私は元々、技術畑の人間でね。ヒュウガについては色々と調べたが、肝心の動力源や、人の生命力を食う意味は、分からなかった。残念な事にな」

少尉は少し間を置いた。

「……ヒュウガはまた国難を救うだろう。それが意味するところは、姫にも分かるだろう」
レーベンブロイ基地でそうであったように、命を吸われるのは、たぶん、私なのだろう。それで国が戻って、民が安心出来るのなら……しかし、だからって、自分を捨てられるものなのだろうか。

「私はやれるだけの事をする。姫には、また壁の内側で緩やかに過ごしていて欲しい。お父上や、お母上や、姉上と、また一緒に暮らすんだ。そうでなくてはいけない。軍人以外が犠牲を払って得た平和など、尊くはないのだよ」

「軍人なら……軍人なら、犠牲になって良いのですか」

「その覚悟を持っているから、軍人なのだよ。姫、軍人とはそういうものだ」

「私には……納得出来ませんよ」

「……そうだな。それが正しい人の在り方だよ」

それきり、私達は静かに夜の深さに紛れた。

……。

白い砂だ。いや、違う。砂は、嵐以外の時には空に舞っているものじゃない。その白い砂は、触るととても冷たい。指の上でその砂は、静かに水となり、雫となり、地面へと落ちた。これは……雪だ。本で読んだ事がある。確か、雨が寒さで固まって、こんな風にシャーベットの氷になって積もるものだと書いてあったように思う。

私は、曇った、雪の点で覆い尽くされた空を見た。雪も砂のように不愉快なものなのだとばかり思っていた。その考え方は全く持って誤りだ。こんなに冷たくて、みずみずしくて、そして何より、綺麗なものだとは思ってもみなかった。

遠くでぐるると鳴き声がする。ヒュウガだ。ヒュウガが近くにいるんだ。

私は声のする方へ足を向けた。じゃりりと、砂と違った感触がして、足が深く地面に埋れた。砂と違って、靴に雪が張り付いて、どんどん足が重くなっていく。ヒュウガは近くにいるのに、歩みが悪くて中々辿り着けない。雪は雪でこれもまた、大変なものだと思った。

ここはどこだろう。いや、どこだったのだろう。何故この風景は、砂塵に置き換えられてしまったのだろう。

……。

アンジェリカ少尉は、ヒュウガの背中に乗って、遠くに小さく見える王都を見ていた。

「少尉、アンジェリカ少尉、アンジェリカ・オリオン少尉」

「三度も呼ばなくても聞こえている。どうした、姫」

「何をなさっているのですか」

「次の目標を見据えている。が、何かおかしい」

私も王都の方面を見る。しかし、壁が見える事以上の事は分からなかった。

「何がおかしいのです」

「……それを考えていた。何か、心の奥底から訴えてくるものがあるんだよ。姫は、何も違和感を感じていないみたいだな」

それきり、アンジェリカ少尉は、また王都をじっくりと眺めていた。

……。

「ハスキーボイスはたまにああやって、敵陣を見据えているよ」

朝食の時、レイチェル少尉と同席する事になった。私は、少尉の事について話した。

「なんと言っていた？」

「違和感がある、と言っていました」

「ふむ……警戒した方がいいな。ハスキーボイスの勘は、推論と合わさって相当に鋭い。あいつは論理と勘をうまく事組み合わせられる逸材だからな」

「そんなに凄いのですか、アンジェリカ少尉の勘は」

「大体当たる。外しても、警戒してたが故に別の事柄に対処出来たという事が多い。あいつの言う事にはバス中佐も一目おくくらいだ」

部下に警戒体制を敷かせる、と言って、レイチェル少尉は足早に去っていった。私は、少尉のた

めに簡単な食糧を炊事の方に見繕ってもらって、持っていく事にした。

.....？

ヒュウガの背中に登った。

少尉は私が持ってきた食べ物を口に入れながら、今度は真反対の、レーベングロイ基地の方角を見ていた。

風が出ていた。しかし不思議と砂は舞わず、この国では珍しいものであった。少尉の乱暴に後ろでまとめた髪が揺れて、肩に当たっていた。

「ヒュウガの背中では地面より高いから、砂がここまでくるという事は相当な強風である事を意味している.....しかし、これだけの風が吹くのに全く砂が舞っていない.....姫は、もし自分が敵だったら、私達をどのように攻め落とすかい？」

考えた事もない質問に、少し思案した。

「そうですね.....私達は前回のように、砂嵐を盾にする事が出来ません。私が敵なら、晴れている今、攻め込む事を考えます」

「私もそう思う。しかし、奴さん達の姿形は全く見えない。都心が見える程明瞭、蜃気楼もない。何故、奴さんは攻め込まない？」

「確か、相手の軍隊はあまり足の早くない機体を使っているのですよね？ だったら、移動は視界が不明瞭な時が良いのではないのでしょうか。足が遅いとその分、敵に見つかりやすいです。見つかってしまうと、対処の時間を与えてしまう事になります。攻める時は視界良好、移動する時は不明瞭、というルールを持っているのではないのでしょうか」

「おお、姫は賢いな。この国の未来は安泰だ。何せこのような賢い姫がいるのだから」

少尉はからからと笑って、私の頭を乱暴に撫でた。子供ではないのだし、そもそも、私は少尉と同年だ。子供扱いするなんて酷いものだ。

.....でも、褒められた事は素直に、嬉しかった。

「しかしこの風.....懐かしいな。故郷を思い出す」

.....！

「バス中佐、それは本当ですか」

「間違いはない。敵一機により、レーベングロイ基地は陥落したそうだ。我が軍の他基地の幾つかも、その特機の強襲により陥落している。我々は.....まだ、運が良かった。主力部隊を失ったわけではないからな」

その言葉には、レーベングロイ基地の総員を持ってしても勝てない可能性があった、という事が透けて見えていた。

私達は、この話を総司令部のテントで聞いていた。これは、指揮を行う人間全員を集めた会議で、私は特別に参加を許されていた。

「それはどんな機体なのですか」

ポニー大隊のハートランド大尉は、神経質な声で尋ねた。

「四脚で、二脚に変形出来る赤い機体だそうだ」

「それは……」

その場の全員がどよめいた。

それはヒュウガの事では、ないだろうか。

「アンジェリカ少尉、どう思うかね」

「……」

少尉は答えない。

「アンジェリカ少尉が敵軍と内通し、あの機体の情報を横流ししたのでは」

コロナ中尉だ。中尉は根も葉もない事を平然と言っている男のようだった。にやにやとした顔で、中尉は続ける。

「アンジェリカ少尉とあれは元々我が軍とは無関係という噂ですからな、なに、別に疑っているわけではない。しかし、可能性としてはあり得るわけでして……」

「中尉殿、私は誓って、敵に加担は致しません」

「ははは、それはもちろん、そう言うでしょうなあ」

「中尉。適当な事を吹聴して回る癖は改めたまえ。アンジェリカ少尉が本当に敵に回っていたのなら、レーベンプロイ基地より本体たる我々が襲撃されていたはずだ。敵の目的は我々の無力化であって、基地の破壊ではない」

バス中佐の一撃に、中尉は身を縮めた。

ふん。いい気味だ。

「その特機は、すぐにでも我々を襲撃すると考えて良いのでしょうか」

レイチェル少尉だ。

「すぐにはないだろう。いくら敵が強大でも、補給なしでは返り討ちに合うだけだ」

「中佐、奴はすぐ来ます」

「何故だね、アンジェリカ少尉」

「……勘、であります」

その言葉にはいくつかの嘘が含まれていた。バス中佐は、それに気づいたのかどうかは分からない。しかし、少なくとも、少尉の考えをすぐに察した。

「アンジェリカ少尉、レイチェル少尉は特機と戦うための準備をしたまえ。ハートランド大尉以下は拠点移動の準備を。特機は構うな、人員と機材の保護が最優先だ」

何故嘘をついたのですか、と、私はアンジェリカ少尉に聞いたかった。しかし少尉は、ヒュウガのお腹側にある操縦席に閉じこもって、出てこなかった。

「ハスキーボイスはどうしたんだ？」

レイチェル少尉も不思議そうだった。

「ヒュウガは何か、分かるの？」

ぐるる、とヒュウガは何かを答えようと務めていた。

.....。

私はヒュウガの前側の席に座った。少尉がそうしてくれと言ったからである。

「操縦はこちらで行う。姫は座っているだけでいい」

「少尉。少尉は、特機というものに、心当たりがあるのではないですか？」

「何故そう思う」

「.....勘、であります」

私は、先程の少尉を真似して、いかにも深刻そうな顔と声を出してやった。

そうすると、少尉はぶっと吹き出した。

「姫にはかなわんな。レイチェル、聞こえるか。貴隊の全員にだけ聞こえるように通信を繋いでくれ」

「.....完了した」

「私は陸軍技術部、アンジェリカ・オリオン少尉.....まァ、今更改まる必要もないな」

ヒュー！ とレイチェル隊の人達ははやしたてた。

「貴隊の使用する機体は、ヒュウガ解析データを基に作られたものである事もまた、みんな知っての通りだろう。私は、貴隊がヒュウガと縁があるという事から、今回ヒュウガについての情報を渡そうと思う。これはバス中佐にも話していない点が含まれる。必要だと思うなら、噂好きのコロナ中尉に漏らしても構わない。この情報をどう使うか、どう解釈するかは貴君らの自由である」

そこまで言うと、少尉は一度区切った。レイチェル隊の沈黙が、これから重要な話をする事なのだと教えてくれている。

「まず初めに、今回の敵に関してだ。名をコハクという。ヒュウガ型陸戦兵器の2番機で、武装については私の知る限りでは遠距離射撃が得意だ。しかも重装備で、接近戦まで持ち込むまでに相当に苦勞する。性格はヒュウガと違って従順で、臆病な方だろう」

「そのコハクとやらに乗ってるパイロットの技量は？」

「推測だが、恐らく軍人と民間人だと思われる。私と姫のような組み合わせだと思ってもらっていい。ヒュウガを見ている貴隊なら分かると思うが、これらは兵器としては著しく安定性がない。レーベンプロイ基地陥落時の情報だけでは判断出来ない要素が多すぎる。一機とはいえ、過大に戦鬪力を見積もって欲しい」

「何故少尉はそのような敵軍の情報を持っている？」

「それに関してはバス中佐から口止めを受けている。貴人が私を不審に思うなら、バス中佐に問い合わせてくれ。ただ、少なくとも背中から撃つような、敵軍の手先ではないので安心して欲しい.....私の言う台詞ではないな。もし貴君らが私を不審に思うなら、いつでも後ろから撃ってもらって構わない。ただし、アンジェリカ嬢は生かしておいてもらいたい。彼女と、貴君らが持つかもしれない不審は無関係だ」

「最後に聞きたい」

レイチェル少尉だ。

「何故敵軍がヒュウガ型の兵器を所有している？」

「……ヒュウガ型陸戦兵器のオリジナルは三機確認されている。ヒュウガ、コハク、そしてギネス。これらは、我が国における前大戦時以前から存在していた可能性がある」

「なんだそれは、ロストテクノロジーとでもいうのか」

「その通り。我々は、旧世紀から存在する兵器から技術を得て、未だ解明しきれていない。最古にして最強なのが、オリジナルのヒュウガ型陸戦兵器だ」

「……つまり、ヒュウガや特機は、敵軍の物でもなければ我が国固有の物でもない、という事か」

「そうだ。我々は、古代人からこれらを借りているだけに過ぎない」

「あの……その、ギネスという機体は、どこにあるのですか」

「前大戦後に解体されたと言われている。ヒュウガとギネスは、前大戦時の英雄的機体だった。ただ、ギネスは、前大戦時に我が国に砂漠をもたらした。ギネスの放つ光線は、全てを砂に変えていく能力があったとされている。その能力を恐れた当時の人間が、二度とこの力が使われぬようにしたとされている。今はどこにその解体されたパーツがあるのか……よくは分かっていない」

「ヒュウガやコハクも、砂漠を作る機体なのでしょうか」

「ヒュウガは違うと思う……あくまで、私の願望だが」

「貴機の情報提供に感謝する。各機、アンジェリカ少尉を不審に思う者は今回の作戦から外れて貰って構わない。また、これによって左遷するなどの不利益は与えない……ま、私を含め、皆左遷されて大事に到るような者はいないだろうがな」

レイチェル隊の各員に意義はないようだった。

「貴隊に感謝する。作戦が終了したら、今回は無条件で私から酒を奢らせて貰おう。貴隊の善戦を祈る」

「全員聞いたか、ハスキーボイスを破産させてやるぞ！ 貴機の活躍を期待している」
そして私達とレイチェル隊は離れた。

……。

今回の主力はレイチェル隊である。

私達はコハクをおびき寄せる餌になっている間に、レイチェル隊がこっそりと背後に回って不意を打つのである。

「コハクもそうだが、四脚でも二脚でも、背後は脆い。レイチェル隊が上手く不意を付ければ、私は……命を掛ける事にはならんだろう」

「何故少尉がヒュウガに命を喰われてしまうのですか？」

それは私の役目だと思っていた。前の戦いでヒュウガは、私を餌食にしていたはずだ。

「ヒュウガが命を吸うのは、たぶん、胸の席にいる人間だからだ。私は、御身を犠牲にするつもりはない」

「少尉……」

「姫、私は前にも言ったが、軍人なのだよ。人を守るのが役目だ。本当なら、姫君を危険な戦場

に出す事すらやってはいけないのだよ。たとえ、路傍の物乞いであろうとも、戦場からは退いてもらう。そこにいていいのは、軍人のみだ」

少尉は、私よりもずっと立派だ。信念に生きていて……私は、同じ歳だというのに、やはり何も出来ないでいる。同じ時間を生きているのに、少尉に勝てる点が何一つない。そんな人間を、少尉は守ると言っているのだ。

少尉は、場合によってはここで命を使い切る覚悟だ。私は、生き残って欲しいと言いたかった。国も民も捨てて、一緒にどこかに逃げようと叫びたかった。

……私は最低だ。国を治める力もない。周りの者にばかり物事を任せていたから、何も出来ない。そうして言いたい事が、何の戦略もなく逃げる、なのだから。いや、むしろ、何も出来ないからこそ、逃げるしか選択出来ないのだ。

姫君？ はっ、何が姫君だ。私こそが路傍の物乞いに落ちるべきだ。私がヒュウガに生命を捧げるべきだ。

前方には小さいながらも敵影が見えた。それが異様に憎たらしく、悪魔のように感じられた。もしあれがなければ……と、見間違いな、しかし、どうしても消す事の出来ない敵意が、私を包み込んだ。

敵影が光る。ヒュウガは、横に飛びのいて、そのビームを回避した。

まだ敵がはっきりと見えないというのに、ビームはヒュウガを的確に狙っていた。少尉のいう通り、長距離からの攻撃が得意なのだろう。

一方、ヒュウガは接近戦が得意なタイプだ。敵との距離を詰める間は、回避に専念するしかない。

敵影が段々とはっきりと見えてくる。ページュのような黒みの多い赤で、ヒュウガよりもずっと武装が多く、角のごつごつが多い。足取りは武装の多さのせいか異様に重たく、背後は砂塵が大量に舞っていた。砂漠に沈む足を無理矢理に動かして走っているせいだろう。

距離が詰まってくると、攻撃はより一層激しさを増してきた。遠距離用の武装から、中距離用の連射出来るものに変えているようだった。時よりミサイルのような、爆発するものも向けられてきた。

しかし、中距離ならヒュウガでも戦える。背中 of 銃身からのビームでコハクへ応戦する。足取りが重くとも避けれるのは、やはりヒュウガと同じ構造ゆえだろうか。お互いのビームが掠め、キップルを破壊し、砂を爆ぜさせる。

「あの動き、相変わらずのビーム重視の武装……やはり」

「アンジェリカ！ アンジェリカよね！？」

不意に敵機からの通信が入る。右側のモニタに、敵機からの通信という表記と、相手の顔があった。声は異様に甲高く、モニタに映る顔と全くイメージが合わなかった。

「……誰なの、あなたは」

「何故私の名前を知っているのですか」

「私はあんたなんか知らないわ」

.....妙だと思った。敵機のパイロットなら、操縦しながら喋っていてもいいはずだ。だと言うのに、モニタに映る女性は操縦桿を握っていない。しかも、ヒュウガとコハクは目下撃ちあい状態である。

「姫、ちょっと合間に入るぞ」
少尉だ。

「オーガスト。やはりお前か」
「アンジェリカ！ ああ、やっぱりアンジェリカだわ！」
コハクからの攻撃が止んだ。こちら手も止めた。

「なぜ、なぜ私から離れたの、アンジェリカ」
「オーガスト、いい加減その女装趣味をやめろ」
「アンジェリカが男っぽ過ぎるのよ」

オーガスト.....さん、は、ぷりぷりと怒っているようだった。その様は女性そのもので、名前の方が間違っているような気がした。.....言っは悪いが、少尉と同じである。

「オーガスト、撤退しろ。今なら間に合う」
「嫌よ。私、レーベンプロイの治める国は全て壊すと決めたのだから。アンジェリカだって、そうでしょう？」

「私は奴さん達に加担する気はない。それに、私達の不幸を国に押し付けるのは酷い誤認だ」
「誤認？ 誤認ですって？ 国が私達に何をしてくれたというの？ 働くだけ働いて死ね、食べ物もなく餓えて死ね、隣国に侵略されて死ね.....レーベンプロイの名の下に、みんな死んでいったわ！ アンジェリカもレーベンプロイに加担するというの！？」

「レーベンプロイの血筋が不幸を生んだわけではない。私達の土地は、そういうところだった、というだけだ。それが分からないから女々しいと言われるのだよ、オーガスト」

「.....お願いだから、また戻ってきてよ、アンジェリカ。ヒュウガも戻ってくれば、きっと閣下も振り上げた拳を下ろしてくれるわ」

「民間人を皆殺しにするような軍隊に正義はない。ヒュウガも、私も、戻る気はない」
ヒュウガはぐるる、と同意するかのように唸った。

「.....分かった。アンジェリカなんか嫌いだ」
コハクは跳ね上がると、ヒュウガと同じように人型に変形した。いくつかのパーツは強制的に体から外れ、砂漠に新しいキップルをもたらした。やはりその機体は、宙に浮いている。

「.....大嫌い.....でも諦めきれない.....やっぱりアンジェリカはアンジェリカだもの。だったら、無理矢理にでも連れ帰るわ。今の私には、それだけの力が、琥珀があるもの」
ヒュウガもまた、コハクに呼応するように人型になった。

私は、それまでビームに恐れ震えていた自分を忘れ、もっと恐ろしい事を思いだした。このまま戦うと、少尉は.....。

「少尉、あの人はどなたなんですか」
「オーガスト・S・ドライ。私と同郷の男だ」
「あの人は.....何故.....」

「故郷を奪われれば怒りもする。それだけだ」

「琥珀は改良されて、一人でも人型になれるわ。しかも、生命力を吸われる事はない……全てシステム側で上手くやってくれるわ。彪我にはまだそこまでのシステムは組み込まれてないようね。だから、どこの誰かも知れない奴が乗ってるんだわ。長引けば長引く程、鹵獲は容易になるわ」

「それは、都心を追われた姫だって同じ思いのはずだ。蹂躪されたのなら蹂躪し返せば良い、などと思上がるから、女々しいのだよ」

少尉は誰にともなくつぶやいた。

「アンジェリカ、投降して頂戴。そうしたら、みんな幸せになれると思うの。戦争が終わったら、故郷に帰って、また一緒にハンモックでお昼寝をしましょう？」

「女々しいオーガスト。隣家のいじめっ子に泣かされた女々しいオーガスト。家へお帰り。もう、我が故郷には、キップルしかないのだよ」

「……私は力を得たんだ！ 欲しいものは全部、私の物だ！」

コハクは勢いよく突進してくる。それを、少尉は最小の動作で避けてみせた。二度、三度と格闘戦をするも、コハクの攻撃は一向に彪我に当たらない。

「聞き分けのない奴はこうする」

少尉は、回し蹴りでコハクの腹部を強打した。コハクは砂漠に体がつくのを恐れるように、無理に体制を戻そうとしている。

「レイチェル！ 当ててみせろ！」

少尉が叫び、コハクの後背から爆発が起こった。

……。

アンジェリカ少尉は、相手が誰か分かった時点で、その性格を踏まえた適切な行動を取ったのだろう。相手を挑発して周りを見えなくさせ、レイチェル隊が上手く攻撃出来るように、状況を持っていたのだ。

作戦は成功した。コハクとそのパイロットは回収され、修理と監禁がなされている。コハクは、少尉の言う通り大人しい性格で、ほとんどの人が近づいても何もしなかった。

ただ。流石に動力源を綿密に調べようとする、ヒュウガ同様抵抗された。これはもはやヒュウガ陸戦型兵器の特質かもしれんな、と少尉は言っていた。

……私は、ほっとしていた。少尉は死なずにすんだ。レイチェル隊の人達も、オーガストさんも、コハクも同様だ。今回の戦闘は、前回以上にヒュウガに不利で、辛いものになるはずだったが、それは少尉の技量と機転によって軽減されていた。やはり、私は、ただそこにいただけであった。

「姫は妙な所にこだわる。姫がいなければ、彪我にはなれなかった。琥珀が出てきた時点で彪我が出せなかったらこちらが負けていたよ。姫はちゃーんと役にたっている」

少尉はそう言ってはくれたが、果たして本当に役にたったのだろうか。私は、そこに納得がいかなかった。

.....。

コハクの「システム」、と呼ばれる部分が解析された時には、レーベンプロイ基地所属の隊は王都のかなり近い所まで侵攻していた。私とアンジェリカ少尉は、そのシステムに関する資料を読んでいた。

「民間人同然のオーガストがあそこまで操縦出来たのは、こいつのおかげか.....」

システムというのは、コハクの胸部にシートの代わりに人間を埋め込んで、その人の脳をコンピュータの代用品とするものだった。コンピュータが自動操縦するので、オーガストさんはほとんど何もしなくていい。かつ、琥珀変形時には、その人柱がエネルギー源となるわけである。

「酷い.....交換しやすい構造になってるって事は、つまり、人を骨の髄まで使うだけ使って、死んだら捨てるだけのものじゃないですか」

「反吐が出るよ。ある意味では効率の良いシステムではあるが.....しかし.....」

「.....コンピュータになっていた人は、どうなったんですか？」

「運がいい事に、今後も人間として生きていけるらしい。今はポニー大隊の医療チームが看てるよ」

「良かった.....」

「どうかな.....片腕を失ったそうだから、何とも言えん.....で、だ」

私達は独房の前にいた。そこには目をらんらんと輝かすオーガストさんがいる。

「お前、これについては知っていたのか？」

「アンジェリカーアンジェリカー」

オーガストさんは少尉がよほど好きなのだろう。手を鉄格子から伸ばして、無邪気に名前を呼んでいる。

「知ってたのか？ 知らなかったのか？」

「知ってるわけじゃないじゃないの。私は、最新システムが搭載されたって事しか知らされてないもの」

「.....次。なんでレーベンプロイ基地を陥落させた？」

「アンジェリカ、甘い物が食べたいわ」

「質問に答えたら出す」

「そういう指示が来たからよ。コハクにもっとも懐かれてる者をパイロットとし、操縦は全てシステムに任せろっていうね」

「その指示は誰から？」

「そんな事よりもー」

オーガストさんは一つ答えるたびに関係のない話を持ち出す。少尉は根気強く情報を聞き出す。私達が独房にいるのは、尋問のためであった。

一通りの情報を得ると、少尉はチョコレートをおーガストさんに渡した。オーガストさんはわあいと言いながら銀紙をめくっている。

コハクに乗っていた時はトゲトゲしい性格に思われたが、こうやって見るとただ子供っぽい人の

ようであった。

「んふふ。アンジェリカと一緒にだし、チョコレートもあるから、私はそれでいいわ。よく考えたらアンジェリカを連れ戻すより、私が寝返った方が早いわよね」

オーガストさんは美味しそうにチョコレートを食んだ。

.....

独房.....基地がないので、仮設置のものである.....を出て、私は当然の疑問を問うた。

「オーガストさんは.....男性でしょうか」

「無論。私より女っぽいのは昔からだ」

「少尉の故郷というのは、もうないのですか？ あっ、その、ごめんなさい、そういう風な事を言われてたので.....」

「私の住んでいた土地は、奴らに殲滅されたよ。国境の小さな村で、そこには小さいながらも林があったんだ。その村では私と、オーガストだけは難を逃れた」

ここはポニー大隊の領域なので、少尉は少し声を落として話していた。いつコロナ中尉の地獄耳が、この話を聞きつけるか分かったものではないからだろう。

「.....ヒュウガと、コロナは、私の村に密かに隠されていた。敵軍はこれを見つけて、これと適合出来る人間を村人から見つけたわけだ。当時は、まだ虐殺が主流ではなかったから、我々は出会い頭に殺されるような事はなかったんだ。.....最終的には、私達以外は殺されたが」

私達はポニーの地区を抜け、少し離れたヒュウガとレイチェル隊の領域を目指した。

「敵軍が快進撃を続けられた理由の一つが、ヒュウガとコハクと、そのパイロットを手に入れたからなんだ。.....もちろん、その時にパイロットとして功績を立てたのは、私だ。私は奴さん達に、自国を攻める事を強いられたんだ。バス中佐が口止めしたのはこれさ。この事が知れば、私はここにいられないだろうというご配慮だ」

「.....」

「私達は天涯孤独の身だったから、どうしても、従うしかなかった。当時10歳くらいか、少しでも反抗しようなら殴られたりしたもんだ。時には、辱めを受けたりもした」

少尉の顔を見る。その顔は、ヒュウガの背中で風を読んでいた時のように真剣であった。

「私は、虐殺が当たり前になってきた時勢に、それに耐えきれなくなった。反抗期だったという事もあったんだろうけど、どうしても抑え難い感情だった。白旗をあげた人間を、銃の的として撃ち殺すという事もあった。正義と称して逃げ惑う民間人を踏み殺した時もあった。今でも、踏み殺した人間の夢を見る。男で、年はたぶん、20の後半くらいで.....背中に背負った荷物も一緒に、ヒュウガの左前脚で、やったんだ。その人は一度踏んだだけでは死にきれず、しかし、死の直前とは思えない程の目線の鋭さで.....ヒュウガを、いや、私を睨みつけたのだ。平穏な生活を戦火に変えた事への怒りと、憎しみと、それ以上に底深くから湧き上がる悲しみに射抜かれ... ..そこで夢から覚めるんだ。私は人に恨まれて当然の、何も救えない、何も出来ない、愚かな人間だと心底意識させられるのだよ。私は、敵軍を離反する時に悟ったんだ。戦場にいていいのは、死を覚悟した軍人のみであるべきだと」

少尉は、きっと、私がそう思う以上に、自分が無力であると思っているのだろう。敵軍に加担した事を悔いてもいるのだろう。そうやって苦味を舐めてきたからこそ、少尉は、何物にも驚かず冷静なのだろう。同じ悲しみを他人にも押し付けないという優しさが、とても尊いものに見えた。

「……酒が飲みたい。姫、少し付き合ってくれないか」

「ええ、もちろんです」

……。

次の日には、我々は王都を取り戻すまでに到った。今ではヒュウガどころかコハクまで我が軍のものなので、その圧倒的な戦闘力により敵は簡単に敗れ去った。

王都奪回による士気の向上は著しく、また、私という王家の血筋が生き残っていたという事実が、それに拍車をかけたらしい。半年と立たずに、我が軍は10年間で失った土地を取り戻すに到った。

少尉は、人は作り直せないといった。間違いなくそうであった。行方知らずの親族は王都陥落時に死亡しているとの確認がとれ、私は涙もなく、ただその知らせを聞いていた。

少尉とは王都で別れた。

「姫は姫として国を治めて欲しい」

別れの言葉は確かこのような事だったと思う。

私は、私に出来る事をやってみた。敵国とは和解し、今後は侵攻しないように条約を結んだ。飢えた土地があれば、可能な限り救済した。ヒュウガで気を失った時の夢……あれはヒュウガが昔見ていた、砂漠の前の世界だったのだろう。あの光景を再び取り戻せるように、砂漠の緑化に努めた。

そうして国の全てを忙しくこなした。戦争から一年が立ち、やっと落ち着いてきた頃に、軍人へ勲章を授与する式に参加した。

どこそこでどんな武勇を立てた者、と側近が呼びかけ、私が勲章を軍服に付け、一言お礼を言うという儀式だ。

「レーベンプロイ基地、レイチェル大尉。この者は先の戦争にて……」

「レイチェル大尉、お久しぶりです」

「なっ……アンジェリカ嬢……？」

「そう呼ばれるのも久々です」

「まさか本当に姫様とは思ひもよりませんでした……無礼をお許してください」

「いいえ、良いのです。レイチェル大尉には、お世話になったのですから」

……！

「……レーベンプロイ基地、アンジェリカ中尉。この者は……」

「……」

「これ、中尉。姫様の前で姿勢を正さないとは何事か」

側近が無礼をたしなめようとするのを遮った。

「少尉……いえ、今は中尉ですね。アンジェリカ・オリオン中尉」

「レイチェルには出世で出遅れてな。私は今や奴の隊の傘下だ。その下にはオーガストもいる。しかも聞いてくれ、噂好きのいけすかないコロナ中尉は降格して今は軍曹だ。人の不幸を笑うのは宜しくないが、しかし心底黄味がいい」

「軍人の儀礼が苦手だと言うのを覚えていてくれたのですね」

「当然だ。姫は私の中ではいつまで立っても姫だからな。どんなに立派に国を治めたとしても、だ」

「では中尉。お願いがあります」

「なんだ？」

「……ここから私を連れ出して、またヒュウガに乗せて下さいませんか？ ヒュウガにも、久々に会いたいのです」

「授与式には飽き飽きしていたところだ。お安い事だよ、姫」

そうして、中尉は私を抱えた。その行動に誰もが驚いたが、私の指示である事を告げると、皆が道を開けた。

外にはヒュウガとコハクが仲良くしている。

ぐるる、とヒュウガは嬉しそうに私を呼ぶ。

お腹が開いて、あの席が降りてきた。中尉は私を、砂漠に迷ったあの時のように、席に乗せてくれた。

「貴人と、貴機の快足を期待しています」

「姫君にとって良い散歩になる事を説に願う」

中尉はにかって笑って、そう答えた。